

<論文>

概説書に見る翻訳学の基本論点と全体的体系

河原清志

立教大学大学院

Abstract

This paper aims to itemize basic issues and points explained in several Translation Studies introduction books and Reader books, thereby attempting to obtain an overall grasp of the whole system of Translation Studies as of today. Nine introduction books and three readers have been analyzed in this paper. Some prospects for the future of Japan's translation studies are stated at the end of this paper as well.

1. はじめに

本稿はこれまで出版された翻訳学(Translation Studies)の概説書9冊を取り上げて、翻訳学の諸論点を整理しつつ、翻訳学の全体像をできるだけ偏りなく体系化して描くことを趣旨とする。補助的にリーダーを3冊取り上げて、重要文献の補強をしたい。概説書9冊とリーダー3冊は以下のとおりである(便宜上、年代順に文献番号を付してある)。

■ 概説書

- ①Gentzler, Edwin. (2001). *Contemporary Translation Theories*. Clevedon: Multilingual Matters.
- ②Bassnett, Susan. (2002). *Translation Studies*. London/New York: Routledge.
- ③Oustinoff, Michaël. (2003). *La traduction*. Paris: Presses Universitaires de France.
(邦訳: 服部雄一郎 (2008) 『翻訳—その歴史・理論・展望』白水社)
- ④Hatim, Basil. & Munday, Jeremy. (2004). *Translation: An Advanced Resource Book*. London/New York: Routledge.
- ⑤Kuhiwczak, Piotr. & Littau, Karin. (eds.) (2007). *A Companion to Translation Studies*. Clevedon: Multilingual Matters.
- ⑥Munday, Jeremy. (2008). *Introduction to Translation Studies*. London/New York: Routledge.
(邦訳: 鳥飼玖美子 (監訳) (2009) 『翻訳学入門』みすず書房)
- ⑦Munday, Jeremy. (ed.) (2009). *The Routledge Companion to Translation Studies*. London/New York: Routledge.
- ⑧House, Juliane. (2009). *Translation*. Oxford: Oxford University Press.

- ⑨Pym, Anthony. (2010). *Exploring Translation Theories*. London/New York: Routledge.
(邦訳：武田珂代子（訳）（2010）『翻訳理論の探求』みすず書房)

■リーダー

- ⑩Venuti, Lawrence. (ed). (2000). *The Translation Studies Reader*. London/New York: Routledge.
⑪Venuti, Lawrence. (ed). (2004). *The Translation Studies Reader* (2nd ed.). London/New York: Routledge.
⑫Baker, Mona. (2010). *Critical Readings in Translation Studies*. London/New York: Routledge.

現在、日本語で参照できる翻訳学の体系書としてはジェレミー・マンデイの『翻訳学入門』（上記⑤の邦訳）が挙げられる（上記③の邦訳『翻訳—その歴史・理論・展望』は分量的に網羅性がなく、また⑧の邦訳『翻訳理論の探求』は独特の論点提起型といえる）。残念なことに、日本人の手による翻訳学の体系書はいまだ出版されていない（但し、個別論点を深めたものや、いわゆる翻訳論を展開したものは多数ある）。このような出版状況のなかで、翻訳学の全体像を有機的に捉えることは、たやすいことではない。そこで、本稿はそれぞれの概説書の傾向や特徴をつかんだ上で、個別論点を整理し、それらを翻訳学の概ねの体系の中で位置づけることにより、翻訳学の全貌を描く試みを行いたい。但し、いずれもアメリカまたはイギリスで出版されている著作であり、西洋中心主義的な傾向が拭い去れないが、その点に関しては後述する。

なお、本稿で諸々の文献や著者の紹介を行うが、本稿の文献リストにそのすべてを掲載すると膨大な量になるため、すべて割愛する。参照したい場合には、①～⑫の巻末に掲載されている文献リストを参照されたい（但し、①～⑫以外の文献は末尾の参照文献を参照）。

2. 個別の文献案内

本節では①～⑫の各内容を紹介する。基本的には章と項、節、項の見出しを紹介するが、括弧内に筆者が判断する論点や主要研究者名を記している場合もある（⑥は上述のように最も代表的な概説書なので、細項目まで記してある。また、⑨では括弧内に主要研究者名を原文表記で記してある）。⑩～⑫のリーダーは、著者名と論文名を原文表記で記してある。グローサリーが掲載されているものは「★」印で示してある。なお、以下は基本的に筆者の訳によるが、③は服部の邦訳、⑥は鳥飼の邦訳（監訳）、⑨は武田の邦訳による。

① **Gentzler, Edwin. (2001). *Contemporary Translation Theories*. Clevedon: Multilingual Matters.**

1章：はじめに

2章：北アメリカ翻訳ワークショップ

翻訳ワークショップの前提、I.A. Richards：ニュー・クリティシズムと翻訳、Ezra Pound：ルミナス・ディテールズ理論、Frederic Will：翻訳のパラドックス、文学翻訳のプロセス、Lawrence Venuti：翻訳再考

3章：翻訳の「科学」

Noam Chomsky：「基底」構造、Eugene Nida：生成文法の翻訳への適用、Wolfram Wills：ドイツにおける翻訳の科学、ドイツ語圏諸国の機能主義理論

4章：初期の翻訳研究

Jiří Levý とチェコ・スロバキアのつながり、James Holmes, Raymond van den Broeck and André Lefevere、評価基準としての *ostranenie*、文学史における翻訳研究の位置

5章：多元システム理論

Jurij Tynjanov：文学的進化について、Itamar Even-Zohar：システム内の文学的關係の探求、Gideon Toury：翻訳の目標テキスト理論に向けて、1980年代の翻訳研究、Gideon Toury：記述的翻訳研究とその超克

6章：脱構築

Foucault：原文の脱構築、Heidegger：命名の限界、Derrida：翻訳と差延、ポスト=デリダ翻訳の議論、脱構築とポストコロニアル翻訳

7章：翻訳研究の将来

② **Bassnett, Susan. (2002). *Translation Studies*. London/New York: Routledge.**

はじめに

1章：中心的な論点

言語と文化、翻訳の諸形態、脱言語化と言語化、等価の諸問題、損失と付加、翻訳不可能性、科学か「副次的活動」か？

2章：翻訳理論の歴史

「時代区分研究」の諸問題、ローマ人、聖書翻訳、教育と現地語、初期の理論家、ルネッサンス期、17世紀、18世紀、ロマン主義、ポスト=ロマン主義、ヴィクトリア期、擬古体、20世紀

3章：文学翻訳の具体的な問題

構造、詩と翻訳、散文の翻訳、戯曲テキストの翻訳

結論

③ **Oustinoff, Michaël. (2003). *La traduction*. Paris: Presses Universitaires de France.**

序論

1章：言語の多様性、翻訳の普遍性

バベルと言語の多様性、言語と世界観、翻訳—言葉の根本的作用

2章：翻訳の歴史

精神と文字、不実な美女、現代

3章：翻訳の理論

起点派と目標派、言語学と翻訳、翻訳の詩学、翻訳の批評

4章：翻訳の作用

翻訳と言い換え、移調と転調、翻訳は歪曲か？、エクリチュールの二ヶ国語併用と自己翻訳

5章：翻訳と通訳

書き言葉から話し言葉へ、翻訳と復元、「自動翻訳」

6章：翻訳の記号

記号体系から記号体系へ、翻訳と国際化、翻訳の記号論、言語を支える翻訳結論

④ **Hatim, Basil. & Munday, Jeremy. (2004). *Translation: An Advanced Resource Book*. London/New York: Routledge.**

1章：翻訳とは何か？（Jakobson 1959/2000; Holmes 1988/2000）

翻訳の定義、言語間・言語内・記号間翻訳、翻訳研究とは何か？、翻訳研究の発展

2章：翻訳ストラテジー（Steiner 1998）

形式と内容、直訳と意識、理解可能性と翻訳可能性

3章：翻訳の単位（Vinay and Darbelnet 1958/95）

翻訳単位の体系的アプローチ、語彙論的単位、思考の単位、分析の前段階としての翻訳単位、様々なレベルの翻訳

4章：翻訳シフト（Catford 1965; Vinay and Darbelnet 1958/95）

翻訳シフト

5章：意味の分析（Larson 1984/98）

指示的意味、曖昧性解消—意味論的構造分析、階層構造と成分分析、内包的意味

6章：動的等価とメッセージの受け手（Nida 1969; Nida 1964）

形式的等価、動的等価、調整、翻訳プロセス：分析・転移・再構成

7章：テキストの語用論と等価（Koller 1995; Levý 1967/2000）

適切に定義された翻訳、ラング志向 vs パロール志向の等価、等価：二重のつながり、意思決定、翻訳者の意思決定の動機付け要因、テキスト語用論

8章：翻訳と関連性（Gutt 1998）

テキストから認知へ、推論と関連性、記述的 vs 解釈的、直接的 vs 間接的翻訳、コミュニケーションの手がかり

9章：翻訳におけるテキストタイプ（Reiss 1977/89）

テキスト性の基準、有標性、テキスト・ベースの情報、読者補完の情報、テキスト類型論

10 章：翻訳におけるレジスター (Gregory 1980)

言語使用と言語使用者、制度的=コミュニケーション的コンテキスト、単一レジスターという神話、機能的役割関係 (テナー)、記号論的相互行為：観念構成的・対人的・テキスト形成的メタ機能

11 章：翻訳におけるテキスト、ジャンル、ディスコース・シフト (James 1989; Bruce 1994)

ジャンル・シフト、テキスト・シフト、ディスコース・シフト、ディスコース・シフトの事例研究

12 章：翻訳における権力主体 (Fawcett 1995)

排除すべき権力、権力の一表現としての翻訳者の声、翻訳者と倫理、制度内の制度、書き換え、支援

13 章：イデオロギーと翻訳 (Niranjana 1992)

翻訳研究の文化的転回、ジェンダーと翻訳、ポストコロニアリズムと翻訳研究、ポストコロニアリズムの見直し

14 章：情報技術時代の翻訳 (Arnold, Balkan, Meijer, Humphreys and Sadler 1994)

翻訳・グローバリゼーション・ローカリゼーション、機械と翻訳者、電子コーパス

★鍵概念の解説

(註) 本書は、Section A (introduction)、Section B (extension)、Section c (exploration) という構成からなり、各セクションが上記 14 ユニットで構成されている。() 内は、Section B で紹介されている文献である。細項目は Section A による。

⑤ **Kuhiwczak, Piotr. & Littau, Karin. (eds.) (2007). *A Companion to Translation Studies*. Clevedon: Multilingual Matters.**

1 章：Bassnett, Suzan. 文化と翻訳

なぜ翻訳研究は文化的転回を遂げたか、文化資本とテクスチャル・グリッド

2 章：Pym, Anthony. 哲学と翻訳

翻訳研究と西洋哲学、哲学の例としての翻訳、翻訳の理論化のための権威としての哲学、哲学の翻訳、将来の方向性：哲学の限界

3 章：Anderman, Gunilla. 言語学と翻訳

(細目なし)

4 章：Long, Lynne. 歴史と翻訳

翻訳の歴史とはまさに何か、翻訳史の重要性、翻訳史をどのように航行するか (言語の問題、文学の問題、宗教的・哲学的問題、科学との交流、探求と征服)

5 章：Hermans, Theo. 文学翻訳

Ted Hughes にとっての殺鼠剤、翻訳を理解する、言語的な特徴、機能するコンテキスト、問題のある他者

6 章：von Flotow, Luise. ジェンダーと翻訳

アイデンティティから複数存在性へ、1 つめのパラダイム：探求と反発、2 つめのパラダイム：ジェンダーの不安定性と翻訳

7章：Snell-Hornby, Mary. 演劇とオペラの翻訳

はじめに：ページかステージか？、翻訳研究における舞台演技（1970年代：新しいアプローチとコンセプト、1980年代と1990年代：独立した理論的アプローチの発展、記号論的アプローチ、全体論的アプローチ、演劇と聴衆：社会文化的視点）、オペラ翻訳（舞台字幕）、舞台翻訳者と制作チーム（翻訳か翻案か）、結論：将来の展望

8章：O'Connell, Eithne. 字幕翻訳

字幕翻訳の歴史（初期の時代の吹き替えと字幕、国による字幕翻訳の選好の出現）、字幕翻訳とは何か？（声の再現、字幕、オープン／クローズ・字幕、吹き替えと字幕の利点・欠点の相対性、字幕翻訳の方法の選択に影響を与える要因、制約された翻訳としての字幕、リアル・タイム字幕）、制約された翻訳としての字幕（少数言語の字幕翻訳、舞台翻訳）

9章：Schäffner, Christina. 政治学と翻訳

翻訳の政治性、政治的テキストの翻訳、翻訳の政治問題化

⑥ Munday, Jeremy. (2008). *Introduction to Translation Studies*. London/New York: Routledge.

1章：翻訳学における主要な論点

翻訳という概念（翻訳の射程、翻訳の定義、Jakobsonの翻訳3種、翻訳類似概念、西洋以外の翻訳概念）、翻訳学とは何か（誕生の経緯、社会的背景、会議・書籍・学術誌・団体）、翻訳小史（ギリシャ・ローマ時代、文法訳読法、米国の翻訳ワークショップ、言語学的手法）、ホームズ／トゥーリーによる「地図」（Holmesによる俯瞰図）、1970年代以降の進展（新しいアプローチ・パラダイムの誕生、翻訳学の学際性）、本書の目的と各章の紹介

2章：20世紀以前の翻訳理論

「逐語訳」対「意味対応訳」（キケロ、聖ヒエロニムス、釈道安、仏典翻訳、アラブ世界での翻訳）、マルティン・ルター（聖書翻訳、ルター）、忠実性・聖霊・真理（‘spirit’の訳）、初期の体系的な翻訳理論の試み（カウリー、ドライデン、ドレー、ティトラ、厳復）、シュライアーマハーと異なるものへの価値付与（2つのテキストタイプ、異化作用と同化作用）、19世紀と20世紀初頭英国の翻訳理論、現代翻訳理論へ向けて

3章：等価と等価効果

ローマン・ヤコブソン（メッセージ全体での翻訳可能性、言語間の差異）、ナイダ（語の意味論、意味の位階構造化、意味構造分析、変形生成文法を応用した翻訳プロセス、形式的等価と動的等価、ナイダ理論の批判論）、ニューマーク（意味重視の翻訳とコミュニケーション重視の翻訳）、コラー（対照言語学と翻訳の科学、5つの等価概念）、その後の等価概念の展開（ベーカーの5つのレベルの等価、等価概念の批判論、比較のための第三項）

4章：翻訳の産物とプロセスの研究

ヴィネイとダルベルネのモデル(直接的翻訳と間接的翻訳、翻訳の5つのステップ)、キャトフォードと翻訳の「シフト」(レベルのシフトとカテゴリーのシフト)、翻訳におけるシフトについてのチェコの論考(レヴィー、ミコの表現のシフト、ポポビッチの文体的等価)、翻訳の認知的プロセス(レデレールによる翻訳の三段階のプロセス、関連性理論を基底にしたガットのモデル、ベルのモデル)

5章：機能的翻訳理論

テキスト・タイプ(ライスのテキスト・タイプ論、その批判論、スネル=ホーンビーの統合アプローチ)、翻訳行為(ホルツ=メンテリの翻訳行為モデル)、スコポス理論(フェルメールのスコポス理論、その批判論)、翻訳のためのテキスト分析(ノードのテキスト分析、機能主義的アプローチの3つの観点)

6章：談話分析とレジスター分析のアプローチ

言語と談話のハリデイ派モデル(選択体系機能言語学とレジスター)、翻訳の質を評価するためのハウス・モデル(顕在化翻訳と潜在化翻訳)、ベーカーのテキスト・レベルと語用論レベルの分析(主題構造と情報構造、結束性とブルム=クルカの明示化仮説、語用論と翻訳)、ハティムとメイソン(テキスト分析モデル)、翻訳の談話分析とレジスター分析アプローチへの批判

7章：システム理論

多元システム理論(イーヴン=ゾウハーの多元システム理論、その批判論)、トゥーリーと記述的翻訳研究(記述的翻訳研究、翻訳行動の規範論、初期規範・予備的規範・運用規範、翻訳の法則、トゥーリー理論への批判論、チェスタマンの2つの翻訳普遍性)、チェスタマンの翻訳規範(作品規範ないし期待規範・プロセス規範ないしプロフェッショナル規範)、その他の記述的翻訳研究のモデル(操作学派、ランベールとヴァン・ゴープの4段階の記述の枠組み)

8章：文化的・イデオロギー的転回

書き換えとしての翻訳(ルフェーヴルの主張)、翻訳とジェンダー(サイモンのジェンダー研究の視点、ハーヴィーのゲイ・テキスト翻訳分析)、ポストコロニアル翻訳理論(サイモン、スピヴァク、ニランジャナ、バスネットとトリヴェディ、バーバ、アイルランド)、理論家のイデオロギー(サイモン、バスネット、アロージョ、クローニン)、翻訳とイデオロギーに関する他の視点(イデオロギー、検閲、言語間の権力不均衡)

9章：翻訳者の役割：可視性・倫理・社会学

翻訳の文化・政治的課題(不可視性、受容化と異質化、否定分析論)、文芸翻訳者の立場と立ち位置(耳・声、翻訳の創造性、翻訳者の姿勢と立ち位置、介入行為性)、出版産業の権力ネットワーク(権力プレイ、アングロ・アメリカの文化的覇権)、ヴィヌティの論考に関して、翻訳の受容と書評(翻訳書評)、翻訳の社会学並びに歴史的研究(ブルデュー理論、翻訳の社会学)

10章：翻訳の哲学的理論

スタイナーの解釈学的運動（スタイナーのモデル、信頼の解釈学）、エズラ・パウンドと言語の力、翻訳者の使命（ベンヤミン、純粹言語）、脱構築（ノリス、デリダ、ルイス、濫用的忠実性）

11 章：新メディアからの新たな方向性

コーパスベース翻訳研究（翻訳の典型的特性、コーパスの種類、オロハン、ベーカー、ヨハンソン）、視聴覚翻訳分野の名称と性質（デレバスチタ、視聴覚翻訳の名称と種類、字幕の性質と規範、視聴覚翻訳の要素、映画言語の意味作用コード、弱い立場の翻訳、ファンサブ、ビデオゲーム翻訳）、ローカリゼーションとグローバル化（ローカリゼーション、翻訳エコロジー）

12 章：結論のことは

⑦ Munday, Jeremy. (ed.) (2009). *The Routledge Companion to Translation Studies*. London/New York: Routledge.

1 章：Munday, Jeremy. 翻訳研究の諸論点

翻訳実践の歴史と初期の「理論」、「翻訳研究」の勃興、「翻訳」とは何か？、翻訳研究の射程、翻訳研究における文化のおよび他の「転回」、本書

2 章：Newmark, Peter. 翻訳理論における言語的、コミュニケーション的段階

翻訳理論の4つの段階（言語学的段階、コミュニケーション的段階、翻訳理論の機能のおよび倫理的段階）

3 章：Hatim, Basil. コンテキストにおけるテキストの翻訳

コンテキストの中のテキスト、テキスト機能と翻訳スコポス、テキスト化のプロセス、単位「テキスト」、翻訳におけるジャンルのシフト、社会的テキスト実践としてのディスコース、結論と翻訳分析者のための示唆

4 章：Albir, Amparo Hurtado. and Alves, Fabio. 認知活動としての翻訳

翻訳プロセス、翻訳能力、翻訳プロセスと翻訳能力に関する実証的・実験的研究

5 章：Katan, David. 異文化コミュニケーションとしての翻訳

文化フィルター、フレームのシステムとしての文化、テクニカル・カルチャー：共有された百科事典的知識、フォーマル・カルチャー：機能主義者・適切な慣習、インフォーマル・カルチャー：認知的システムと価値観、氷山の外部：社会的パワー関係、文化的仲介者、結論

6 章：Hermans, Theo. 翻訳、倫理、政治

決定、翻訳と倫理、表象1、介入、表象2

7 章：Hartley, Tony. 技術と翻訳

インフラ技術、専門用語ツール、オーサリング・ツール、コンピュータ支援翻訳ツール、機械翻訳ツール、プロジェクト管理ツール、共同翻訳ツール、評価技術

8 章：Pöchhacker, Franz. 通訳研究の諸論点

展開と最先端、ミームとモデル、主な論点、趨勢

9 章：Chiaro, Delia. 視聴覚翻訳の諸論点

吹き替え、字幕、他の字幕翻訳の様式、視聴覚製品の翻訳：言語的・文化的問題
★鍵概念の解説

⑧ **House, Juliane. (2009). *Translation*. Oxford: Oxford University Press.**

1章：翻訳とは何か？

翻訳の性質、翻訳の種類、翻訳の定義、翻訳と通訳、人間および機械による翻訳、文化を超えたコミュニケーションとしての翻訳

2章：翻訳に対するいくつかの視点

起点テキストへの注視、解釈のプロセスへの注視、解釈の可変性への注視（文化的、イデオロギー的、文学的）、原文との無関連性と改作、翻訳の目的への注視

3章：翻訳における等価

等価の異なった類型、等価をめぐる議論、等価を確立するための分析的枠組み、顕在化翻訳と潜在化翻訳、文化フィルターの概念と機能、等価の限界？

4章：翻訳評価に対する見方

印象主義的・主観的な見方、反応を基底にした行動主義的な見方、目標テキストに関連した見方、原文と翻訳物の比較に基づいた見方、原文の分析、原文と翻訳物の比較、言語的分析対社会的判断

5章：翻訳の教育的使用

翻訳に反対の議論、翻訳に賛成の議論

6章：最近の論点

異文化コミュニケーションとしての翻訳、翻訳プロセスの性質、翻訳におけるコーパス研究、翻訳とグローバリゼーション

⑨ **Pym, Anthony. (2010). *Exploring Translation Theories*. London/New York: Routledge.**

1章：翻訳理論とは何か

2章：自然的等価：翻訳行為以前に言語間・文化間に既に存在する ST=TT の同等の価値

概念としての自然的等価、「等価」対「構造主義」(Sapir, Whorf, Saussure, Mounin)、自然的等価を維持する翻訳手順 (Vinay & Darbelnet, Ayora, Malone)、テキスト・ベースの等価 (Catford, Koller, Reiss)、「比較のための第三項」と「意味の理論」(Seleskovitch & Lederere)、自然的等価の長所、著者からの批判、歴史的な下位パラダイムとしての自然的等価

3章：方向的等価：ある方向で翻訳した際に作出される非対称的な等価

二種類の類似性 (Chesterman)、等価の定義における方向性 (Nida & Taber, Kade)、検証としての逆翻訳、方向的等価の二項対立性 (Cicero, Schleiermacher, Nida, Newmark, Levý, House, Nord, Toury, Venuti)、分類は二つだけか、関連性理論 (Gutt, Wilson & Sperber, Grice)、幻想としての等価 (Pym)、方向的等価の長所、著者からの批判

4章：目的（skopos）：翻訳の目的や狙い、翻訳が受容される状況下で果たすべき機能新パラダイムの鍵としてのスコポス（Reiss & Vermeer, Holz-Mänttari）、ライス・フェアメアとスコポス的アプローチの起源（Reiss, Bühler, Nord, Snell-Hornby）、ホルツ＝メンテリと翻訳者の専門知識に関する理論（Holz-Mänttari）、目的に基づいた「事足りる」翻訳の理論（Vázquez-Ayora, Hönig & Kussmaul）、誰が目的を決めるのか（Vermeer, Ammann, Nord, Snell-Hornby, Pym）、目的パラダイムの長所、著者からの批判、プロジェクト分析への応用（Gouadec）

5章：記述：翻訳とはどのようなものかの記述

等価パラダイムに何が起こったか、記述パラダイム内の理論的概念（Toury）—翻訳シフト（Catford, Leuven-Zwart, Kade, Popovič, Holmes, ）・システム（Delabastita, Holmes, Lotman & Uspenski, Even-Zohar, Lefevere, ）、規範（Toury, Chesterman）、「想定された」翻訳（Hermans, Pym, Stecconi）、目標側の優先（Toury）、翻訳の普遍的特性（Bulm-Kulka & Levenston, Olohan & Baker, Zellermayer, Shlesinger, Condit, Kamenická）、法則（Even-Zohar, Toury）、著者からの批判、記述パラダイムの行方

6章：不確定性

なぜ「不確定性」か、不確定性原理（Heisenberg, Quine, Chomsky）、言語の決定性と翻訳の非決定性（Humboldt, Sapir, Whorf, Jakobson, Eliot, Genette, Croce, Wittgenstein, Toury, Halverson, Heidegger, Schleiermacher, Benjamin, Rose）、不確定性と共存するための理論（Augustinus, Nida, Gutt, Locke, Katz, Brislin, Gadamer, Chau, Laygues, Berman, Ricoeur, Kiraly, Pym, Levý, Peirce, Eco, Jakobson）、脱構築（Derrida, Davis, Robinson, Arrojo, Campos）、では、どう翻訳すべきか（Chau, Berman, Mounin, Lewis, Rose, Venuti）、著者からの批判

7章：ローカリゼーション

パラダイムとしてのローカリゼーション、ローカリゼーションとは何か、国際化とは何か、ローカリゼーションは新しい概念か、テクノロジーの役割、翻訳はローカリゼーションの一部か、著者からの批判、ローカリゼーションの行方

8章：文化翻訳

新世紀のための新パラダイムか、バーバと「非実質的な」翻訳（Bhabha, Benjamin, Trivedi）、翻訳不在の翻訳：広範な学問の希求（Jakobson, Serres, Hjelmslev, Even-Zohar, Pym）、翻訳としての民族誌学（Rubel and Rosman, Asad, Clifford, Iser）、翻訳社会学（Callon, Buzelin, Renn）、スピヴァクと翻訳の政治的精神分析（Spivak, Klein）、「一般化された翻訳」（Miller, Vieira, West, Papastergiadis, Sallis, Brodski, Apter, Duarte）、著者からの批判

あとがき：自分の理論を生み出そう

⑩ Venuti, Lawrence. (ed). (2000). *The Translation Studies Reader*. London/New York: Routledge.

1900s-1930s

* (1) Benjamin, Walter. The task of the translator.

* (2) Pound, Ezra. GUIDO's relations.

* (3) Borges, Jorge Luis. The translators of the thousand and one eights.

(4) y Gasset, José Ortega. The misery and the splendor of translation.

1940s-1950s

* (5) Nabokov, Vladimir. Problems of translation: "ONEGIN" in English.

* (6) Vinay, Jean-Paul and Darbelnet, Jean. A methodology for translation.

(7) Quine, Willard V. O. Meaning and translation.

* (8) Jakobson, Roman. On linguistic aspects of translation.

1960s-1970s

* (9) Nida, Eugene. Principles of correspondence.

(10) Catford, J. C. Translation shifts.

(11) Levý, Jiří. Translation as a decision process.

* (12) Reiss, Katharina. Type, kind and individuality of text: Decision making in translation.

* (13) Holmes, James S. The name and nature of translation studies.

* (14) Steiner, George. The hermeneutic motion.

* (15) Even-Zohar, Itamar. The position of translated literature within the literary polysystem.

* (16) Toury, Gideon. The nature and role of norms in translation.

1980s

* (17) Vermeer, Hans J. Skopos and commission in translational action.

* (18) Lefevere, Adré. Mother courage's cucumbers: Text, system and refraction in a theory of literature.

(19) Frawley, William. Prolegomenon to a theory of translation.

* (20) Lewis, Philip E. The measure of translation effects.

* (21) Berman, Antoine. Translation and the trials of the foreign.

* (22) Blum-Kulka, Shoshana. Shifts of cohesion and coherence in translation.

* (23) Chamberlain, Lori. Gender and the metaphors of translation.

1990s

* (24) Brisset, Annie. The search for a native language: Translation and cultural identity.

(25) Gutt, Ernst-August. Translation as interlingual interpretive use.

* (26) Spivak, Gayatri Chakravorty. The politics of translation.

* (27) Appiah, Kwame Anthony. Thick translation.

(28) Hatim, Basil and Mason, Ian. Politeness in screen translating.

* (29) Harvey, Keith. Translating camp talk: Gay identities and cultural transfer.

* (30) Venuti, Lawrence. Translation, community, utopia.

(註) *は⑨⑩で重複して掲載されている文献。

⑩ Venuti, Lawrence. (ed). (2004). *The Translation Studies Reader* (2nd ed.). London/New York: Routledge.

Foundational Statements

- (1) Jerome, Letter to Pammachius.
- (2) D'Ablancourt, Nicolas Perrot. Prefaces to Tacitus and Lucian.
- (3) Dryden, John. From the preface to Ovid's Epistles.
- (4) Schleiermacher, Friedrich. On the different methods of translating.
- (5) von Goethe, Johann Wolfgang. Translations.
- (6) Nietzsche, Friedrich. Translations.

1990s and beyond

- (29) Derrida, Jacques. What is "relevant" translation?
- (30) Nornes, Abé Mark. For an abusive subtitling.
- (31) Mason, Ian. Text parameters in translation: Transitivity and institutional cultures.

(註) ⑨で掲載されている文献は、⑩では省略している。

⑫ Baker, Mona. (2010). *Critical Readings in Translation Studies*. London/ New York: Routledge.

1 部：表象の政治学と力学

- (1) Asad, Talal. The concept of cultural translation in British social anthropology.
- (2) Kahf, Mohja. Packaging 'HUDA': SHA'RAWI's memoirs in the United States reception environment.

2 部：モードと方略：翻訳の（諸）言語

- (3) Sturrock, John. Writing between the lines: The language of translation.
- (4) Venuti, Lawrence. Translation as cultural politics: Régimes of domestication in English.

3 部：テキスト、ディスコース、イデオロギー

- (5) Mason, Ian. Discourse, ideology and translation.
- (6) Nornes, Abé Mark. 'PORU RUTA'/PAUL ROTH and the politics of translation.
- (7) Baker, Mona. Reframing conflict in translation.

4 部：権力者の声：制度的場と提携

- (8) Jacquemet, Marco. The registration interview: Restricting refugees' narrative performance.
- (9) Davidson, Brad. The interpreter as institutional gatekeeper: The social-linguistic role of interpreters in Spanish-English medial discourse.
- (10) Israel, Hephzibah. Translating the Bible in 19th century India: Protestant missionary translation and the standard Tamil version.

5 部：個人の声と立ち位置

- (11) Hermans, Theo. The translator's voice in translated narrative.
- (12) Tymoczko, Maria. Ideology and the position of the translator: In what sense is a translator 'in between' ?
- (13) Inghilleri, Moira. National sovereignty versus universal rights: Interpreting justice in a global context.
- 6 部 : 少数派の問題 : 文化的アイデンティティと生き残り
- (14) Cronin, Michael. The cracked looking glass of servants: Translation and minority languages in a global age.
- (15) Jaffe, Alexandra. Locating power: Corsican translators and their critics.
- 7 部 : 世界システムにおける翻訳
- (16) Casanova, Pascale. Consecration and accumulation of literary capital: Translation as unequal exchange.
- (17) Heilbron, Johan. Towards a sociology of translation: Book translations as a cultural world system.
- 8 部 : 文学的伝統の展開
- (18) Selim, Samah. Pharaoh's Revenge: Translation, literary history and colonial ambivalence.
- (19) Coldiron, A. B. E. Translation's challenge to critical categories: Verses from French in the early English renaissance.
- (20) Levy, Indra. Engendered by translation: Modern Japanese literature, vernacular style, and the Westernesque femme fatale.
- 9 部 : 翻訳と戦争
- (21) Rafael, Vicente. Translation in wartime.
- (22) Stahuljak, Zrinka. War, translation, transnationalism: Interpreters in and of the war (Croatia, 1991-1992).
- 10 部 : 変化する風景 : 新しいメディアと技術
- (23) Raley, Rita. Machine translation and global English.
- (24) Littau, Karin. Translation in the age of postmodern production: From text to intertext to hypertext.
- (25) Cazdyn, Eric. A new line in the geometry.

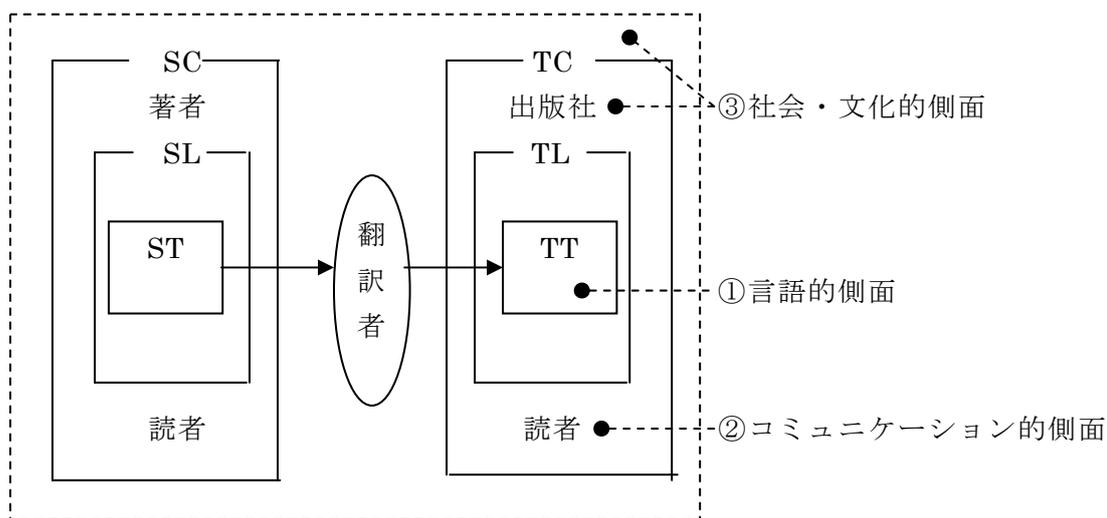
3. 論点の総括

では、翻訳学の理論体系を、上記 12 冊を基に組み立ててみたい。その前提として、翻訳を研究する際に必要な視点を得るために、翻訳の行為状況を見ることにする。

そもそも、翻訳を行うコミュニケーション状況は次の図 1 で示される通りであって、①翻訳者が起点テキストを目標テキストに転換操作する言語的側面、②当該コミュニケーション状況において翻訳行為の結果、翻訳者が原文の意を翻訳読者に効果的に伝

えるというコミュニケーション的側面、③翻訳者が置かれている社会・文化的状況や翻訳行為が社会的に機能するミクロおよびマクロなコンテキストという社会・文化的側面、の3側面が考えられる（図1は稲生・河原 2011 を若干改変したものである）。

図1 翻訳行為の状況



(S: 起点、T: 目標、T: テキスト、L: 言語、C: 文化)

図中に著者、読者、出版社と記してあるのは、出版翻訳の典型事例を念頭に図を作成しているためであるが、出版社を翻訳依頼者とか発注者など、読者を翻訳利用者などとある程度読み替えると、汎用性のある図になるであろう。ローカリゼーションの場合には ST の側にももう少し説明を図に加える必要があるだろうが、汎用性を考えて省略している。

以上をふまえて翻訳学の基本書とリーダーが扱っている論点を整理すると、主に以下の7項目に分けられる。

- (1) 翻訳について
- (2) 翻訳学について
- (3) 翻訳と言語（言語行為としての翻訳）
- (4) 翻訳と異文化コミュニケーション
- (5) 翻訳と社会（社会行為としての翻訳）
- (6) 分野別の議論
- (7) 翻訳学の応用部門

(1) は人類史上、翻訳が歩んできた道程について、(2) は翻訳学という独立したひとつの学問について、(3) は上記①翻訳の言語的側面について、(4) は上記②翻訳の（異文化）コミュニケーション的側面について、(5) は上記③翻訳の社会的・文化的側面

について、(6) は文学翻訳をプロトタイプとしつつ、様々な分野の翻訳について、(7) は翻訳学の応用領域として翻訳評価論と翻訳教育論について、それぞれ扱っている。各項目に細項目を立て、○番号で基本書ないしリーダーを示したうえで、章番号を記してある。これにより、どの論点がどのくらい論じられているかがわかると同時に、該当する文献の引用箇所も参照しやすくなっている。

(1) 翻訳について

翻訳の歴史と歴史学：③2章、⑤4章、⑩(1)(2)(3)(4)(5)(6)

人類がどのような翻訳の歴史を歩んできたかについては、理論的にも興味深いところである。⑩のリーダー（第2版）が新たに、聖ヒエロニムス、ドライデン、シュライアーマハー、ゲーテ、ニーチェを掲載したことは、翻訳学における翻訳の歴史の重要性の表れであろう。⑥2章は翻訳学の歴史とともに翻訳の歴史が概観できるし、また②2章は時代区分ごとの翻訳（理論）の歴史、③は分量は少ないがテーマ別の翻訳史を扱っている。

(2) 翻訳学について

翻訳学の基本論点：②1章、③3章、⑥1章、⑦1章、⑧1章、⑧2章、⑧6章、⑨1章、⑩(13)

翻訳学の歴史的経緯：①4章、②2章、⑥2章

翻訳の科学性：①3章

翻訳の射程・定義：④1章、⑩(8)、⑫(24)

翻訳と通訳：③5章、⑦8章、⑫(8)(9)(13)(22)

翻訳と記号：③6章、⑩(19)

基本書ではその学問分野の概観と諸々の理論装置や論点とその相互連関について簡潔に書いているのが普通であるが、翻訳学も例外ではない。それを最も意識しているのが⑨である。（自然的・方向的）等価、目的、記述、不確定性、ローカリゼーション、文化翻訳を扱っている（これらをパラダイムとしている。この点、基本書ではないが Chesterman (1997) が(super)meme という語を造語したのは賢明であったかもしれない）。いずれにしても諸論点間の共約不可能性はできるだけ解消した、より統合力のある体系化が望まれる（この点、Snell-Hornby の統合アプローチは総花的でやや空中分解の感がある）。

翻訳学で肝要な点として、翻訳学の経緯と翻訳の射程・定義が挙げられる（詳しく

は後述)。また、⑦2章によると翻訳学は、(1) 言語学的段階、(2) コミュニケーション論的段階、(3) 機能主義的段階、(4) 倫理・美的段階、を経てきたという。しかし、基本書ではないが Snell-Hornby (2006) が、(1) 前言語学的段階、(2) 言語学的段階、(3) 1980年代の文化的転回、(4) 1990年代の学際的段階、(5) 1990年代の諸転回、(6) 2000年代の回帰？、という流れを示しているが、この理解のほうが全体を俯瞰するうえで有効であるように思われる。

筆者なりの理解を概括してみると(河原 2010c)、翻訳には言語行為性と社会行為性の2面性があり、理論も前者から後者へ、とその分析対象を移行させてきている。翻訳の言語行為性に焦点を当てた理論は、翻訳学の言語学的段階と言われるものであり、「等価」「翻訳シフト」「翻訳ストラテジー」「テキストタイプ論」などが挙げられる。これに社会行為性が加味されると、「スコポス理論」「レジスター分析」「システム理論」「規範論」などが展開され、言語学的段階の次世代の理論となってきた。ところが、翻訳学がテキスト分析中心の段階から、「文化的・イデオロギー的転回」を経験することで、「書き換えとしての翻訳」「ジェンダーの翻訳」「ポストコロニアル翻訳理論」「翻訳の(不)可視性」「翻訳の権力ネットワーク」などに焦点が当てられるようになった。これは翻訳のみならず広く表現行為という社会実践のもつ社会的・文化的・歴史的な意義や役割を射程に入れているものである。ところがこれらの転回は、言語学にも同様に起きているものであり、Snell-Hornby の言うように、翻訳学は言語学へと回帰するときかもしれないし、その回帰先は social turn を経験した言語学ということになる(社会言語学、社会語用論、言語人類学など)。いずれにしてもテキストとコンテキストの連関をバランスよく緻密に論じてゆく必要がある。

また、⑨8章が否定的に書いている「文化(の)翻訳」が、翻訳の射程・定義とも関連して、翻訳学で物議を醸している。主に人類学や民族誌学が、特定の言語テキストではなく、文化現象をテキストで表現することを翻訳と言い(Geertz に代表される解釈人類学; 小泉 2006)、延いては表現行為全般をすべて翻訳と捉える考え方で翻訳行為を分析する動向(真島 2005)がひとつ。もうひとつは、ある社会現象を翻訳というメタファーで語る翻訳社会学が興っている動向である(⑨8章参照)。人間の記号作用の翻訳性、という概括の仕方もあるだろうが、翻訳学というポリシステム内の今後の潮流に注目したい。

最後に、ここで取り上げられるべきなのは翻訳学の科学性と相まって翻訳学の研究方法論である。現状はコーパスの利用について⑥11章が、理屈づけから理論へ昇華させる手順について⑨が扱っているのみである。基本書レベルでももう少し多様な研究方法論やメタ理論への言及がなされてもよいかもしれない。

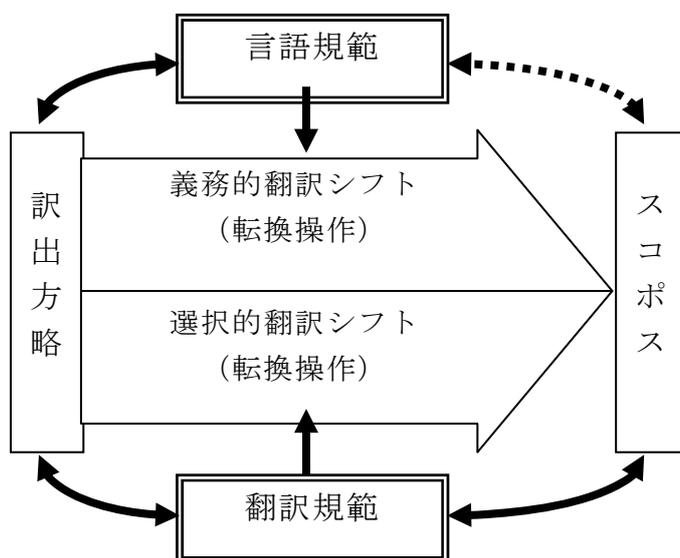
(3) 翻訳と言語(言語行為としての翻訳)

翻訳と言語・言語学：③1章、⑤3章、⑦2章
翻訳の意味と等価：④5章、④6章、④7章、⑥3章、⑧3章、⑨2章、⑨3章、⑩(9)
翻訳の不確定性・解釈学的運動：⑥9章、⑨6章、⑩(7)(14)
脱構築：①6章、⑩(20)、⑪(29)
翻訳の単位：④3章
翻訳のテキストタイプ・レジスター：④9章、④10章、⑥6章、⑦3章、⑩(12)、⑪(31)
翻訳ストラテジー・シフト：④2章、④4章、④11章、⑥4章、⑩(6)(10)(11)(22)
翻訳の認知プロセス：④8章、⑥4章、⑦4章、⑩(25)
機能的翻訳理論：⑥5章、⑨4章、⑩(17)
翻訳規範論：①5章、②3章、⑥7章、⑨5章、⑩(16)

前述した翻訳学の言語学的段階の諸学説である。まず、翻訳は言語テキストを扱うものである以上、翻訳は言語学からアプローチせねばならず、両者の関係が論じられなければならない。翻訳はことばの「意味」を扱うものであるので、言語や翻訳の意味の議論が必要になる(狭義の意味論に加え、言語使用の意味を扱う語用論)。この点、言語学的段階の諸学説が言語の構造論(ラング)に着目して意味論や統語論からの翻訳分析を行っていたが、近時は語用論に着目した研究が進展している段階であると言えよう。また起点テキストの解釈や目標テキストの産出をめぐって、意味の不確定性が論じられてしかるべきだが(意味の多義性・多様性・履歴変容性・不可知性について論じた深谷・田中 1996、田中・深谷 1998の「ことばの意味づけ論」参照)、意味の不確定性に関しては言語学的な緻密な議論は翻訳学ではあまり見られず、むしろこれまではそれに対して哲学的抽象論や(宗教論的)解釈学、記号論や脱構築からアプローチしており、言語テキストを基盤にして、地に足の着いた意味のダイナミズムの緻密な分析や論の展開があまりなされていないかもしれない。また翻訳学では起点テキストと目標テキストとの「等価」を想定するが、「等しい価値」の構築という観点からの意味構成主義ないし社会構成主義的なアプローチからの議論はないようである。他方、テキストタイプ別の議論や選択体系機能言語学を基底にしたレジスター分析論、テキスト言語学を基礎にした理論などの蓄積は多い。ただ、これらの難点は、言語の意味のダイナミズムを論じることに欠けていることで、やはりそこには認知的スタンス(上記の意味構成主義)や一般的な談話分析の手法が必要になってくるだろう。翻訳では言語構造の異なる2言語を扱う以上、そこには翻訳シフトが起き、それに対応するための翻訳ストラテジー論が展開されている。翻訳の単位とは、どのレベルでそのシフトが起きるかの分析である。またそこには翻訳プロセスの解明も必要となり、バイリンガリズムや関連性理論などを応用した翻訳の認知プロセス論も展開されている。さらには、スコポス理論、多元システム理論(後述)、翻訳規範論があり、翻訳行為の動態モデルを示すと、以下の図2のようになる(図1は稲生・河原 2011より)。そしてこの翻訳動態モデルを支える操作定義としては、以下が挙げられる(稲生・河原 2011)。

- ①訳出ストラテジー：一定の翻訳目標を達成するための計画的な方策。
- ②翻訳規範：あるコミュニティが共有する一般的価値ないし考え方を、特定の状況にふさわしく、適用可能な作業指示に翻訳したもの（Toury 1995）。
- ③スコポス：翻訳というコミュニケーション行為の目的（Reiß & Vermeer 1984/1991）
- ④翻訳シフト：起点言語と目標言語の構造上の差による、起点テキストと目標テキストの言語上のズレ（Catford 1965）。これに関連して「転換操作」とは、翻訳シフトを実現するためのさまざまな操作のことで、言語構造上、義務的にシフトさせる必要がある義務的なものと、目標言語らしさを獲得するためや一定の文体的効果を狙うためにおこなう選択的なものがある（Vinay & Darbelnet 1958; 河原 2010b）。

図 2 翻訳学の諸概念の動的関係



翻訳動態モデルとしては、様々な翻訳規範（初期規範、予備的規範、運用規範）に統御されつつ、当該原文の目標言語における訳出の目的（スコポス）が決められ、そのスコポスによりさらに翻訳規範も制約を受ける。それを受けて今度は、当該スコポスという目標達成のために翻訳の段階で、ある程度の訳出方略が練られ、それを土台にして具体的な翻訳実践プロセスの中で翻訳シフトを実現するために諸々の転換操作が行われる、という流れである。概ねこのような理解を基に諸理論を体系のなかに位置することが可能だろう。

(4) 翻訳と異文化コミュニケーション

翻訳と文化：⑤1章、⑦5章、⑫(2)(3)(7)

翻訳に関わるコミュニケーション行為には大きく2つあり、ひとつは原著を翻訳者が読んで解釈する営み、もうひとつは原著が翻訳者に翻訳され、目標言語社会で読者に読まれる営みである。前者は前述(3)で扱ったもので、ここでは後者を主に扱う。そこには「異文化」の壁が立ちはだかつており、翻訳と文化の関係を論じるうえで異文化コミュニケーション学の知見が必要となる。また、文学理論では、作者中心、作品中心、読者中心の3つの研究が主に考えられるが、翻訳のこの局面は読者中心の目標言語志向の研究ということになる。そこで、「受容理論」や「読者反応理論」の知見も応用できるし、カルチュラル・スタディーズにも開かれている。またメディア・スタディーズにも接合可能であり、翻訳のダイナミズムを読者論から論じる可能性は今後大きく開かれているのかもしれない。

なお Holtz-Mänttari の翻訳行為モデルはコミュニケーション理論と行為理論を基に、下記のミクロ・コンテクスト内でのコミュニケーション過程を扱っている (Holtz-Mänttari 1984)。

(5) 翻訳と社会 (社会行為としての翻訳)

文化的・イデオロギー的転回：⑥8章

翻訳の機能・作用・役割：③4章、⑫(14)

翻訳と権力・イデオロギー・アイデンティティ：④12章、④13章、⑥9章、⑩(18)(21)(24)(30)、
--

⑫(4)(5)(6)(11)(12)(15)(16)(17)(21)

翻訳と政治：⑤9章、⑦6章

翻訳とジェンダー：⑤6章、⑩(23)(29)

文化翻訳：⑨8章、⑩(26)(27)、⑫(1)

前述した翻訳学における「文化的・イデオロギー的転回」の諸学説で、現在最も注目を浴びている分野である。言語テキストが産出・受容されるという翻訳行為を取り巻く状況、周囲には、(1)ミクロ・コンテクスト、(2)マクロ・コンテクスト、(3)グローバル化されつつある全世界、の3つの局面があると想定できる。多少ずれるがこれに呼応して、社会行為としての翻訳の役割・機能も、(1)目標言語内の側面、(2)起点言語＝目標言語間の側面、(3)起点言語＝目標言語を超えた側面、の3つを想定できる (河原 2010c)。基本書の体系では、この3つの側面が俯瞰的に理解しづらいので、筆者の知る範囲で具体的に記してみたい。

(1) 目標言語内の側面では、ベルギーの Lefevere による「書き換えとしての翻訳」という主張が代表である。文学テキストは権力、イデオロギー、制度などの要因で「書き換え (rewriting)」を余儀なくされ、権力的地位にある人々が一般大衆による消費を

支配しているのに呼応して、翻訳テキストも権力によって統御されているとする (Lefevere 1992)。これは目標言語内での支配的イデオロギーや支配的詩論によって、翻訳は原テキストの表象を歪めるとするものである。前述の Holtz-Mänttari の翻訳行為モデルも翻訳を取り巻くマイクロ・コンテキストの側面といえる。また、アメリカの Venuti は、受容化 (domestication) 方略を採ることによって、翻訳はアングロ・アメリカの主流文化に反映される自民族中心主義を後押しする暴力行為となると主張する (Venuti 1993=⑫(4))。その他では、中国の Kenan は中国において翻訳は社会変革のための触媒となってきたとしている (Kenan 2002)。これらはすべて、一言語内における翻訳の受容過程における翻訳の歴史的・社会的機能・役割に焦点を当てた議論である。ちなみに日本にも同様の議論があり、日本における文明開化当時、翻訳によって先進西洋文明を受容し、日本国およびその国民を文明開化させるという役割を翻訳が担っていたと福澤諭吉が記していたとしている (吉田 2000)。

(2) 起点言語＝目標言語間の側面では、代表格は「内なる植民地」を自称するアイルランドの Cronin である。アイルランド文学の英語への翻訳が、17 世紀以降支援を得て推進され、英語使用が経済的にも政治的にも促進され、イングランドに対抗して自らの文化を保護することに寄与した反面、アイルランドにおける英語の強化につながったという皮肉も存在するとしている (Cronin 1996)。その他、中国の Yameng は、北＝南間、および南＝南間における翻訳に表象の歪みがあり、南北の格差が助長されると主張している (Yameng 2007)。何を、どう訳すか、についての判断が、発展途上国に関する十分な知識に基づいて行われていないため、戦争、占領、恐怖、病気、貧困などについての共感と理解が欠如し、歪んだ表象が翻訳によって作られるという。次に、これは上記(1)に当てはまるかもしれないが、アメリカの Tymoczko は、翻訳のイデオロギーは翻訳者がどういう政治的な立ち位置 (position) を取るかによって決まるのであり、これは Bhabha の言う狭間の領域 (space between) とは異なると主張する (Tymoczko 2003=⑫(12))。翻訳はほとんどの政治的行為同様、社会に参画し社会的変革を興す有効な手段だと見る見方を反映している。またアメリカの Jaffe は、フランス語からコルシカ方言への翻訳は、フランスによるコルシカ支配への政治的抵抗という意味合いがあり、翻訳は言語や文化の権力関係を前面に押し出すものだという (Jaffe 1999)。これに関連して、何を訳すかということについて、Boldizar が「翻訳は概して一方通行である。弱小国は大国の文学のうち自国語に翻訳する価値があるものはすべて矢継ぎ早に翻訳するが、逆は成り立たない。弱小国は (大国に対して) 偏狭な見方や無視した姿勢を取るわけにはいかないが、大国は弱小国に対してはそういう姿勢を取ることができるのである」と主張していることが目を引く (Boldizar 1979)。これらは [起点言語の国家 (ないし共同体)] = [目標言語の国家 (ないし共同体)] の間の権力不均衡からくる言語覇権やイデオロギーといった翻訳の政治問題を提起しているといえよう。

(3) 起点言語＝目標言語を超えた側面では、翻訳に内包する政治・イデオロギー的な操作性を指摘した、アメリカの Gentzler と Tymoczko の見解がある (Tymoczko &

Gentzler 2002)。植民地主義や帝国主義が可能だったのは、それが大国の軍事的・経済的優位だけでなく植民地や被支配者に関する知識や表象によっても支えられたためであり、それには翻訳が深く関与していたことから、そのことを翻訳のもつ知識・文化の創造性全般について敷衍した。また Gentzler は、起点言語＝目標言語を超越した翻訳の機能・役割を概括的に捉えている (Gentzler 2002)。翻訳は起点言語側・目標言語側という差異を超えて、社会構築・文化構築を行う機能を担っているとす。フェミニズムの立場からは、カナダの Simon が、主体が自由に越境する今日の世界において、翻訳は国民国家概念を弱め、文化の越境や偶発性による文化のダイナミックな創造を促すと主張している (Simon 2002)。これらは国家や国境を越え、翻訳が世界全体で創造的知の営みの一環であることを主張している。

これら(1)(2)(3)は起点テキストを目標テキストに翻訳することを想定しているが、言語間翻訳から翻訳概念を拡張すると、前述 (2) の諸学説が現出する。「文化翻訳」は翻訳をテキストから解放した捉え方で、文学理論で作者中心、作品中心、読者中心の3つの研究があるのと平行に論じると、翻訳者志向の理論と言える。つまり、翻訳者の仲介的位置、文化的異種混濁性、異文化形成作用、文化的越境性などを扱い、「人」に注目した近時の翻訳研究の潮流とも呼応し、ある種の流行となっている。但しテキスト分析不在の翻訳理論として批判もあり、翻訳者と翻訳テキストを結節する共約可能な接点の探究が求められる。

最後に、⑤ 9章が翻訳の政治性、政治テキストの翻訳、翻訳研究の政治問題化、の3つの視点から社会行為としての翻訳を分析していることは注目に値する。いずれにしても、こうした一連の「文化的・イデオロギー的転回」を経た学説群を分析すると、翻訳者は中立かつ不可視の存在ではなく、Munday のいう「介入者としての翻訳者」という考え (Munday 2007) が基底となり、それがどういう歴史的場面で適用されるか、どういう社会的側面に焦点を当てるかによって各主張の力点の置き方が異なると言える。

(6) 分野別の議論

文学翻訳：①2章、①5章、②3章、⑤5章、⑥7章、⑩(2)(3)(5)(15)、⑫(18)(19)(20)
舞台翻訳：⑤7章
字幕翻訳：⑤8章、⑥11章、⑦9章、⑩(28)、⑪(30)、⑫(25) * 聖書翻訳：⑫(10)
翻訳と情報技術：④14章、⑥11章、⑦7章、⑨7章、⑫(23)
翻訳哲学：⑤2章、⑥10章、⑩(1)(4)

翻訳の分析は文学翻訳をプロトタイプとして行われてきた。ところがたとえば日本の翻訳の売り上げの取扱分野の比率の統計からすると、文学などの出版翻訳はわずか1%のシェアしか占めていない。実務翻訳がその9割以上を占めているのが現状である (JTF 業界調査委員会 2009)。したがって、実務翻訳を主眼においた翻訳理論もそれ

に見合った割合で発展してしかるべきである。ところが実務翻訳を正面から論じたものは意外と少なく、ローカリゼーションの文脈で論じられたり、最先端の CAT の利用をめぐるものが多い。

逆に文学翻訳は、翻訳学自体が文学研究や比較文学論からひとつの端を発していることから、議論は多彩で深みもある。特に、ロシア・フォルマリズムの系譜を継ぐ多元システム論、そしてそれを受けた記述的翻訳研究の流れは翻訳学の本流とも言えよう。

もうひとつの流れは、翻訳概念を拡張した字幕翻訳・舞台翻訳である。映像上の字幕または舞台での字幕というメディア上の制約を大きく受けるこの分野は、具体的な翻訳技術論をめぐる議論の蓄積がかなり進んでいる。その他、ファンサブやビデオゲームといった新規分野の動向も注目したい。

これら字幕翻訳も含んだ実務翻訳の分野は、グローバリゼーションの潮流と情報技術、および言語エコロジーとの関係など、翻訳を取り巻くマクロ社会学的な視座を持たざるを得ない。基本書においてもこのことへの言及が今後なされることが求められよう。

最後に翻訳哲学であるが、主な学者名を記すと、Schleiermacher、Pound（言語の力）、Benjamin（行間翻訳の純粹言語）、Steiner（解釈学的運動）、Derrida（脱構築）、Norris（脱構築）、Graham（脱構築）、Lewis（濫用的忠実性）、Niranjana などが挙げられよう。

⑤ 2 章では、(1)哲学の例としての翻訳、(2)翻訳の理論化のための権威としての哲学、(3)哲学の翻訳、という項目を設けて翻訳と哲学について論じている。その最後に(4)哲学の限界、という項目を立てて、翻訳理論家は哲学上の言説と翻訳実務との仲介者たるべきで、翻訳学は哲学上の言説よりもむしろ、翻訳者の行動や発言に注意を払うべきだと主張している。いずれにしても翻訳テキスト分析学派との共約可能な結節の仕方が模索される必要があるだろう。

(7) 翻訳学の応用部門

翻訳評価論：⑧ 4 章

翻訳教育論：⑧ 5 章

翻訳の客観的評価とそれを機軸にした教育方法論は今後の翻訳学の大きな課題と言ってよいが、まだ体系化も未整備で、主観と直感がものを言う状況であるのが現状だろう。ホームズが翻訳学を「理論研究」と「応用部門」に分け、後者をさらに「翻訳者養成」「翻訳支援」「翻訳批評」に分けている（Holmes 1988/2000=⑩(13)）。そして、「翻訳者養成」は指導法・テスト技術・カリキュラムデザイン、「翻訳批評」は改訂・翻訳の評価・翻訳の書評に峻別しており、基本的にはこの路線で純理論と応用部門とを接合していく必要がある。

これまでその試みがいくつかなされている。Reiss のテキストタイプ論は元々、評価

論を見据えた議論であった (Reiß 1977/1989)。Nord はスコpos理論を応用した教育論を展開しているし (Nord 1997)、日本のものだと藤濤はスコpos理論を応用した評価論を展開している (藤濤 2007)。また、House はレジスター分析の枠組みから評価論と教育論を論じている (⑧4章・5章)。(但し、翻訳学自体が応用理論的性格を内包していることに鑑み、翻訳学における純理論と応用理論とは判然とは峻別し難く、相互作用による互いの発展が今後期待される。)

以上が翻訳学体系における学説群の位相と問題系の所在である。なお、本稿で示した翻訳学の全体像は、冒頭でも述べたようにあくまでも「概説書・基本書」から抽出したものであるため、その旨付言しておきたい。翻訳学の全体像を俯瞰するには、⑩(13)のみならず、van Doorslaer (2009) を参照されたい。

4. 展望と課題—翻訳と翻訳学の多様性と自立性のために

以上をふまえて、さらに考察を深めたい。現在、グローバル化が進む一方で、多文化主義や多言語社会を標榜し、文化や言語の多様性が叫ばれ、多様性の存続を叫ぶ声が強い。このことは翻訳学においても正面から論じなければならない重要なテーマである。そこで筆者が考える「翻訳学における8つの多様性」について紹介したい (河原 2010a)。

(1) 「翻訳」概念の多様性：何を翻訳とするか？

翻訳の定義、射程 (記号間翻訳・言語内翻訳をどこまで含めるか)、類似概念との峻別 (trans-literation、trans-creation、trans-editing、adaptation、localization、appropriation 等との区別)

(2) 「翻訳」の対象の多様性：何を翻訳するか？

文学、新聞、広告、映画、ウェブ情報、ゲーム等から、非テキスト情報・出来事や社会文化現象まで

(3) 「翻訳」言語と文化・社会の多様性：何に／から翻訳するか？

メジャー言語 (英語)、マイナー言語：言語覇権と言語エコロジーの問題

(4) 「翻訳」方法の多様性：何の道具で翻訳するか？

CAT (翻訳メモリ、機械翻訳) 等

(5) 「翻訳行為」の「主体」の多様性：誰が翻訳をするのか？

プロの翻訳者、多分野におけるノンプロによる翻訳行為、素人の翻訳行為

(6) 「翻訳」研究の対象の多様性：何を翻訳研究の対象にするか？

テキスト (翻訳物そのもの)、文化・社会 (翻訳行為がなされるミクロおよびマクロ・コンテキスト)、翻訳者自身 (翻訳者のライフ・ヒストリーやハビトゥス研究)、翻訳読者、翻訳に関係する諸々の権力主体、翻訳の歴史など

(7)「翻訳」研究の手法の多様性：何の分野から翻訳を研究するか？

言語学、社会学、哲学、文学、心理学、脳科学、ポストコロニアリズム等

(8)「翻訳」研究の担い手の多様性：どこの研究者が翻訳を研究するか？

ヨーロッパ、南北アメリカ、アジア、オセアニア、アフリカ：脱中心化（decentering）、脱ヨーロッパ化（deEuropeanization）の問題、非自民族中心主義的翻訳理論の可能性

(1)は何を以って翻訳とするかが争点となる。文学翻訳をプロトタイプとして、同心円状に非典型的な翻訳形態が布置される。その外円には文化（の）翻訳と言われる、記号間翻訳が存在し、他方で翻訳類似概念（adaptation、localization、appropriation など）もそこに布置され、隣接領域と境界画定を明確化すべきか、接点領域を拡大すべきかが問題となってくる。さらにその外円には翻訳をメタファーとして捉える見解、つまり社会的事象を翻訳と看做したうえで当該社会現象を分析する学派が存在することになる。いずれにしても、翻訳学がその射程をどう（Toury のいうように規範的ではなく記述的に）定めるのか、今後の動向に注目したい。

(2)は翻訳のマルチモダリティ性のことである。各々の翻訳対象が持つ独自のメディア上の制約から、純然たる翻訳とは異なる翻訳行為がなされる。特に、trans-editing が実態であるメディア翻訳（ジャーナリズム翻訳）はまだ研究が始まったばかりである。また、広告やウェブ情報の翻訳は、純然たる翻訳とは異なる広義のローカリゼーションの範疇に入るため、前述(1)の論点とも関連が深い。

(3)は英語帝国主義状況での言語エコロジーが、翻訳という言語接触の営みによってどのように流動するかである。そのダイナミズムが政治・経済上のグローバル化の国際関係の動向とどう連関があるか、歴史学的な視座も交えながらマクロな「翻訳社会論」として論じてゆく必要がある。と同時に、言語の多様性に対応した言語相対論の新機軸として、翻訳相対論というアプローチから「翻訳言語論」を論じることも可能であろう。

(4)これは広義の翻訳情報技術論で、技術と人間とのコラボレーションの多様性の動向が注目される。そして今後は後述の(5)とも関連するが、技術とのコラボレーションはプロ翻訳者だけでなくノンプロにも開かれていかねばならず、更なる技術革新の動向に注目したい（機械翻訳や翻訳メモリにおけるプレ・エディティング、ポスト・エディティング、あるいはクラウド・ソーシングの利用など）。

(5)これは現在の翻訳学で最も見過ごされている多様性である。一般に、翻訳について語るとき、その9割9分はいわゆる「プロ」の翻訳家（翻訳者）による翻訳を対象にしている。しかし、人類全体の情報の生成・伝達・受容・解釈・編集などの一連の情報過程において不可視とされているのが「ノンプロ」による「翻訳（的）行為」（translational / translatorial act）の情報過程への深い関わりである。前述(2)とも関連するが、例えばジャーナリズム、とくに新聞という媒体（メディア）における翻訳行為

は、プロの翻訳者を雇う場合もあるが、ほとんどの場合、翻訳者としてのアイデンティティを持たないプロのジャーナリストが編集行為の一環として翻訳も行う (trans-editing) という位置づけである (Bielsa & Bassnett 2009 参照)。これはジャーナリズムに限らず、あらゆる業界でなされる翻訳的行為全般について当てはまる。またこのような多分野におけるノンプロによる翻訳行為のみならず、現在ではファンサブ翻訳などの素人による翻訳行為 (いわゆる市民翻訳) についても翻訳学が注目をしている。いずれにしても、広義の翻訳者にはプロ翻訳者、ノンプロの翻訳行為遂行者、市民翻訳を行う一般市民の3類型があることを前提に、これらに序列をつけるのではなく水平な座標軸を据えたうえで、全人類の情報過程における翻訳行為 (翻訳者) の機能・役割について論じる必要もあろう。そのなかで翻訳場の新しい地平も発見され、翻訳研究の新たな場も開拓されるかもしれない。

(6)は、研究対象の多様性で、翻訳物自体、翻訳者の行動・発言、翻訳読者、翻訳に関係する権力主体、翻訳を取り巻く多文化社会の状況、翻訳の歴史などが考えられる。これも翻訳概念・翻訳対象・翻訳技術・翻訳主体を拡張することで、かなり多様な議論が今後可能となろう。

(7)は、翻訳学が扱う射程の多様性に呼応し、アプローチする学問領域や研究方法論にも多様性が生じる。翻訳学の学際性は頻繁に叫ばれているが、今一度問い直してみる必要がある。例えば「規範」の概念は翻訳学よりもはるかに研究の歴史が長い法学・倫理学・社会学などで深淵な議論が展開されており、同じ理論装置について異なる学問分野を越境してある程度共約可能な接点領域から新たな視座を得る作業も必要ではなかろうか。単に翻訳を分析するために必要な理論を他分野から探し出し、それを借用して翻訳学に適用する循環 (他分野ドメスティケーション) に陥っているとすれば、翻訳学が自立した「学」へと脱皮することが困難かもしれない。学問としての自立性と学際性についての今後の翻訳学の取り組みに注目したい。

(8)翻訳学は現在、オリエンタリズムさながら、東洋志向が一部で強い。このこと自体、翻訳学が西洋中心主義に陥っている証左かもしれない。going East を叫ぶ西洋流の翻訳学の東洋進出の波が今後も高まるのかもしれない (Wakabayashi & Kothari 2009 参照)。上記のように新たな翻訳場の発見・開拓と同時に、新たな翻訳研究場の発見・開拓のためには、非西洋地域の研究者は自国 (または共同体) が長年培った翻訳論を理論へと昇華させる作業を行うことがひとつ (その代表的な試みは柳父・水野・長沼 2010)、自国 (または共同体) の言語作品が西洋でどのように翻訳され表象されているかの研究をさらに行うことがひとつ、Cronin の言うように、西洋と言っても一枚岩ではなく、今後はある程度地政学性が希薄化した学問のグローバル化に伴った世界的な越境的コラボレーションを行うことがひとつ。そのなかで、「日本の翻訳学」という、地域的にも学問的にも周縁の場に置かれた分野が、翻訳学ポリシステムの中で場を見出し、認知され、基盤を固め、徐々に中心へと向かうダイナミズムに乗り、延いては翻訳学自体が学問ポリシステムにおける中心へ向かう波に乗ることを些か期待しつつ、西洋中心の翻訳学の基本書およびリーダーの紹介を終える。と同時に、日本語による

「日本の翻訳学」の基本書の出現を（学問ポリシステムという権力構図に飲み込まれざるを得ないポストコロニアルな閉塞感を感じつつ）期待したい。

.....
【謝辞】

本原稿のドラフトの段階で、モントレール国際大学准教授の武田珂代子先生、神戸大学講師の伊原紀子先生、そしてアメリカ・ケント州立大学教授の Judy Wakabayashi 先生からアドバイスを頂いた。ここに厚く感謝を申し上げる。

【筆者紹介】 河原清志 (KAWAHARA Kiyoshi) 東京外国語大学大学院・青山学院大学・津田塾大学などの非常勤講師（通訳学・翻訳学などの担当）。専門は通訳翻訳学・認知言語学・英語教育。立教大学異文化コミュニケーション研究科博士後期課程在籍。
.....

【参考文献】(①～⑫に掲載されている文献以外のものに限る)

- Bielsa, E. and Bassnett, S. (2009). *Translation in global news*. London/New York: Routledge.
- Boldiszar, Ivan. (1979). *Small counties, great literatures?* Budapest: Publishers & Booksellers Association.
- Catford, J.C. (1965). *A linguistic theory of translation*. Oxford: OUP.
- Chesterman, A. (ed.) (1989). *Readings in translation theory*, Helsinki: Oy Finn Lectura Ab.
- Chesterman, A. (1997). *Memes of translation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Cronin, M. (1996). *Translating Ireland: Translation, language, cultures*. Cork: Cork University Press.
- 藤濤文子 (2007) 『翻訳行為と異文化間コミュニケーション—機能主義的翻訳理論の諸相—』松籟社
- 深谷昌弘・田中茂範 (1996) 『コトバの＜意味づけ論＞』 紀伊国屋書店
- Gentzler, E. (2002). Translation, poststructuralism, and power. In M. Tymoczko and E. Gentzler (eds). (2002). pp. 195-218.
- Holtz-Manttäri, J. (1984). *Translatorisches Handeln: Theory, methodology and didactic application of a model for translation-oriented text analysis*. Amsterdam: Rodopi.
- 稲生衣代・河原清志 (2011) 「英語ニュースの字幕翻訳ストラテジー」青山学院大学英文学会 (編) 『英文学思潮』第 83 卷 (印刷中)
- JTF 業界調査委員会 (編) (2009) 『翻訳白書—第 3 回翻訳業界調査報告書平成 20 年度』日本翻訳連盟
- 河原清志 (2010a) 「翻訳とは何か—研究としての翻訳 (その 1)」山岡洋一 (発行) 『翻訳通信』100 号記念号 (2010 年 9 月号)
- (2010b) 「翻訳とは何か—研究としての翻訳 (その 2) : 翻訳シフト論」山岡洋一 (発行) 『翻訳通信』101 号 (2010 年 10 月号)

- (2010c) 「翻訳とは何か—研究としての翻訳 (その3) : 翻訳の社会的役割」 山岡洋一 (発行) 『翻訳通信』 102号 (2010年11月号)
- Kenan, L. (2002). Translation as a catalyst for social change in China. In M. Tymoczko and E. Gentzler (eds). (2002). pp. 160-183.
- 小泉潤二「解釈人類学」 綾部恒雄 (編) (2006) 『文化人類学 20 の理論』 (144-161 頁) 弘文堂
- Lefevere, A. (1992). *Translation, rewriting and the manipulation of literary frame*. London/New York: Routledge.
- 真島一郎 (編) (2005) 『だれが世界を翻訳するのか : アジア・アフリカの未来から』 人文書院
- Munday, J. (ed.). (2007). *Translation as intervention*. London/New York: Continuum International Publishing Group.
- Nord, C. (1997). *Translating as a purposeful activity: Functionalist approaches explained*. Manchester: St Jerome.
- Reiß, K. (1977/1989). Text types, translation types and translation assessment. translated by A. Chesterman, In A. Chesterman (ed.). (1989), pp. 105-115.
- Reiß, K. & Vermeer, H. J. (1984/1991). *Grundlegung einer allgemeinen Translationstheorie, 2.* Auflage, Tübingen : Niemeyer.
- Simon, S. (2002). Germaine de Staël and Gayatri Spivak: Culture brokers. In M. Tymoczko and E. Gentzler (eds.). (2002). pp. 122-140.
- Snell-Hornby, M. (2006). *The turns of translations studies: New paradigms or shifting viewpoints?*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- 田中茂範・深谷昌広 (1998) 『意味づけ論の展開』 紀伊国屋書店
- Toury, G. (1995). *Descriptive translation studies and beyond*. Amsterdam: John Benjamins.
- Tymoczko, M. and Gentzler, E. (eds.). (2002). *Translation and power*. Amherst/Boston: University of Massachusetts Press.
- van Doorslaer, L. (2009). Risking conceptual maps. In Y. Gambier and L. van Doorslaer (eds.) *The metalanguage of translation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. pp. 27-43.
- Vinay, J.-P. & Darbelnet, J. (1958). *Stylistique comparée du français et de l'anglais*. Paris: Didier. translated and edited into English by Sager, J.C. & Hamel, M.J. (1995). *Comparative stylistics of French and English: A methodology for translation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Wakabayashi, J. & Kothari, R. (2009). *Decentering translation studies*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Yameng, Liu. (2007). Towards 'representational justice' in translation practice. In J. Munday (ed.). (2007). pp. 54-70.
- 柳父章・水野的・長沼美香子 (編) (2010) 『日本の翻訳論 アンソロジーと解題』 法政大学出版局

吉田忠（2000）『『解体新書』から『西洋事情』へ一言葉をつくり、国をつくった蘭学・英
学期の翻訳』芳賀徹（編）（2000）『翻訳と日本文化』（50-66頁）山川出版社